

大学生時代の矢部貞治（5）

A Basic Study on Teiji Yabe's student days at Tokyo Imperial University (5)

大谷伸治*

Shinji OHTANI*

要旨

本稿の目的は、矢部貞治（東京帝国大学法学部教授・政治学）が大学生時代に受講した講義を特定し、教授たちからどのような影響を受けたのかを考察することである。（5）では、神川彦松（外交史講座）の科外講義「国際政治学概論」を3年次に受講した矢部の筆記ノート进行分析した。結果、のちに「政治政策学」を固有の政治学の領域と位置づけた矢部政治学は、神川の国際政治学講義から「暗示」を得て政治学、政策学、政治哲学の三領域分類と定義を継承したものの、人間個人の「自由意思」を強調した点など根本的な部分については、小野塚喜平次が「最狭義の政治学」と位置づけた政策学・政策研究を継承したものであったことを明らかにした。

キーワード：矢部貞治 神川彦松 国際政治学 政治政策学 小野塚喜平次

13. 神川彦松 —政治政策学への示唆—

(1) 1925年度「国際政治学概論」講義

政治学史講義に専念するようになった南原繁に代わり、1925年度から国際政治学の科外講義を引き継いだのは、南原と同期の神川彦松（外交史講座）であった。1925年11月の教授会で、「科外講義として神川教授「国際政治学概論」（一二、三回）開設決定」が承認された¹⁵⁶⁾。国際政治の「講義をするための準備は一つもしていなかった」南原¹⁵⁷⁾と違い、神川は満を持しての登板であった。神川の回想によると、1915年春に大学卒業後、国際法学者の立作太郎（1915年当時は外交史講座担任、国際公法第一講座兼任¹⁵⁸⁾）に師事し外交史研究を始めた当初の課題は、外交史を国際政治史に書き替えることだったが、その前提条件として国際政治学を開拓・樹立する必要性に気付き、以後10年をかけておおよその腹案を作ったという¹⁵⁹⁾。つまり、1925年度の「国際政治学概論」講義は、神川が研究者として歩み始めてから最初の10年間をかけて練ってきた国際政治学の構想を初めて語った場であり、日本初の体系的な国際政治学講義だったのである。矢部はこの講義を2回受講し、筆記ノートを残し

た¹⁶⁰⁾。

本ノートは、整理番号112としてまとめられた国際政治、新秩序、外交関連の9冊のうちの7冊目である。これと6冊目以外のノートは、抜書された文献の出版年やメモの日付から、新体制期から戦時期にかけて書かれたものと推定される¹⁶¹⁾。6冊目は、表紙に「International Politics」とあり、今中次麿「国際政治団体と国家状態の類同」（『国際法外交雑誌』27巻1・2号、1928年）、神川彦松『国際聯盟政策論』（政治教育協会、1927年）、藤澤親雄「国際社会本質の考察」（『国際知識』9巻11号、1929年）の抜書とコメントが書かれている¹⁶²⁾。多数決に関するコメントが多いことから、1934年の論文「多数決の社会的機能」を書くための準備であったと考えられる。同論文では、神川『国際聯盟政策論』のみだが、註であげられている¹⁶³⁾。

国際政治学は第一次世界大戦を契機として生まれた新しい研究領域であり、神川は日本の国際政治学の創始者と称された¹⁶⁴⁾。1925年度以降も継続的に国際政治の科外講義や演習を担当して研究を進め¹⁶⁵⁾、戦後、その成果をもとに教科書『国際政治学概論』（1950年）をまとめた。神川は同書のはしがきで、「東大在職中、

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

法学部に国際政治学の講義を開くことに決まったがこれにつきわが国にはまだ一冊の教科書も、まとまった著述もなかつた。終戦後の今日多くの大学に国際政治に関する講義や講座が開かれたが、なほ一冊の教科書さへもない有様」だったと語っている¹⁶⁶。よって、神川のノートも南原のノートと同じく、矢部にとって国際政治学の教科書と同等の意味をもつものであり、国際政治関連の仕事をするにあたって参照していたのではないかと考えられる。

ノートの編目構成を抽出したものが表7である。ノートの最初に日付が記されていない。第一章第一節から始まることからすれば、第1回であることはたしかであろう。だが、日付は特定できない。第2・3回の曜日からすれば毎週火曜日に開講されていたと思われるので、第2回（12月1日）の1週間前11月24日が第一候補となる。だが、その日の矢部日記には「何カシヨウト思ヒ乍ラ炬燵ニキルトツイ嫌ニナツテシマウノデ、今日モ朝カラ夜迄炬燵ニキテ何モシナイ」（1925年11月24日条）とあり、一切外出していない。ならば、第二候補は11月17日だが、矢部は高文試験の最終日で大学には行っていない。11月3日・10日も大学に行っていない。そもそも神川が講義開設を承認されたのが11月の教授会なので、3日・10日では早すぎるだろう。第1回だけ他の曜日におこなわれた可能性もあるが、11月中の日記にはその証拠は見当たらない。おそらく矢部は第1回には出席せず、出席した友人からノートを写させてもらい、第2回から聴講し始めたのではないかと推測される。

矢部は、第2回を聴講した感想を日記に残している。「午後、神川さんの国際政治学概論を聴く。実に素敵な講義だ。政治学と政策学と政治哲学との判然分たるべきを説き、政治学はあくまで経験的普遍化的文化科学なることを力説し、この意味の政治学は従来皆無なりとされた。大山教授の社会学に対する考へを反駁し社会学と政治学とを対等の地位に置くことを力説。実に暗示的ないゝ講義だった」（1925年12月1日条）。実際、神川の講義から受けた「暗示」は、矢部の政治学方法論へ継承されるが、まずは神川の企図を矢部ノートの記述にもとづいて概観しよう。

国際政治学の創始をめざす神川の眼前には、社会学による二重の呪縛が立ちだかっていた。というのは、従来国家学的政治学においては政治を国家現象と捉えたために、無政府状態と見做されていた国際関係を対象とした研究は政治学の対象とならず、進化論を奉じたスペンサー（Herbert Spencer）・コン

ト（Auguste Comte）流の総合社会学によって担われてきたからである¹⁶⁷。しかも、社会学の呪縛は国際政治学のみの問題ではなかった。いわゆる「社会の発見¹⁶⁸」と呼ばれる時代思潮の中で、国家の存在は自明ではなくなり、社会学的国家論や多元的国家論にもとづいた社会科学が流行し¹⁶⁹、従来の国家学的政治学は危機にさらされていた。その急先鋒が大山郁夫であった。大山は、理想主義から現実主義に転換し「科学としての政治学」の樹立を宣言した『政治の社会的基礎』（1923年）で、政治学を社会学の一分科とすることを主張していた¹⁷⁰。政治学者たちは、大山によって「科学としての政治学」の礎石が築かれたことを評価しつつも、社会学に従属することには肯んじえず、政治学を社会学から独立させることをめざしていた¹⁷¹。神川が大山を特筆して反駁したのはこのためであった。つまり神川は、国際政治学という新たな分野を創始する以前に、そもそも従来政治学体系を整理して、社会学からの独立を図らねばならなかったのである。

神川は、新カント主義バーデン学派（西南学派）のリッケルト（Heinrich John Rickert）の科学方法論を援用して、政治学体系を整理したうえで、そこに国際政治学を位置づける道を選んだ。すなわち、従来混同されてきた政治学、政策学、政治哲学を判然と分け、そこに政治史も加えた四者を対等の学問領域として整理し、国際政治学、国際政治史（外交史）、国際政治政策学、国際政治哲学を対応させた。これは、社会学の側で、新カント主義の方法論を援用して、総合社会学から個別科学としての社会学への転換を提唱していた高田保馬に、政治学の側から呼応したものといえよう¹⁷²。

政治学の中にも、先達があった。同じく小野塚喜平次門下の戸澤鉄彦である。神川は、国際政治学を「普遍化的文化科学」、外交史（国際政治史）を「個別化的文化科学」として、両者は対等で同一の価値を有するとあっさり位置づけているが¹⁷³、これは戸澤の仕事が国際政治学に呼応させたものであった。戸澤は1923年に『国家学会雑誌』で連載した論文「政治学疑義」で、リッケルトの科学体系論に修正を加えて、文化科学を二種に分け、「科学としての政治学」（価値関係的普遍化文化科学）と「科学としての政治史」（価値関係的個別化文化科学）を並列に位置づけるとともに、政治学から当為を切り離して、政治価値を研究することは政治哲学に譲らねばならないとしていたのである¹⁷⁴。

だとすれば、神川の独自性は、政策学にあった。政策学を政治学と政治哲学から切り離し並列に位置づけたことにある。ここで興味深いのは、神川は明示していないが、政治学と政策学を切り離すことはおそらく、師である小野塚を乗り越えようとする企てであったことである。

神川は、「従来ノ学者ノ間ニ最モ混同サレシハ」政治学と政策学の関係であったという。「従来ハ此ノ二者ヲ同一物トシ、多少差異ヲ認メテモ、此ノ二者ヲ併セテ政治学ナリトシ、又ハ、政治学ガ原論ニシテ、政策学ガ各論ナリトナス。此ノ二者ノ厳密ナル区別ニ着目スルコトヲ必要トス¹⁷⁵⁾」。神川がここで批判する政治学と政策学を混同する「従来ノ学者」の代表格が小野塚なのである。小野塚は、狭義の政治学を純理的な国家原論と応用的な政策原論を合わせて「国家ノ事実的説明ヲ与ヘ其政策ノ基礎ヲ論スルノ学」と定義し、将来的には国家原論から政策原論を独立させて後者のみをもって政治学と呼ぶ日がくる（最狭義の政治学）と展望していたからである¹⁷⁶⁾。小野塚は、矢部が受講した1924年度「政治学」講義では、政策原論を「政策学」と言い替えているが、狭義の政治学の定義はそのままであった¹⁷⁷⁾。

では、神川は政治学と政策学をどのようにして厳密に区別したのか。それは、経験科学の政治学に対して、政策学を規範学（哲学）と位置づけることによってであった。神川いわく、政治学は経験科学として因果法則を求めるのに対し、政策学は「Sollen ヲ実在性ヨリ抽離シテ、之ヲ批判」し目的手段を求める目的論的（Teleologisch）なものであり、目的、理念（Idee）、価値観念が重きをなすものである。ただし、政策学は因果の関係をすでに含み、法則の知識を前提して初めて立つので、政策学は政治学に依存する。また、政策学は「實際ノ形勢」にも依存する。「即チ、政策ハ目的・法則・歴史ヲ要素トシテ、ソノ上ニ立ツモノナリ¹⁷⁸⁾」。目的は政治哲学、法則は政治学、歴史は政治史の成果にもとづくものであるから、政策学は哲学と科学の中間に位置する学問といえよう。

なお、戦後の『国際政治学概論』では、政策学の位置づけが変わる。リッケルトの科学分類に新たに「実践科学」を追加し、そこに政策学を位置づける。とはいえ、「政策学は、原因・結果の理法を探求する法則科学とは異なり、目的・手段の関係を究明せんとする規範科学である」（傍点ママ）と定義し、「いはゞ哲学と科学との混合物」と述べているから、定義および政治学と政治哲学の中間に位置するという関係性に変更

はない¹⁷⁹⁾。

講義に戻る。神川は、上記のように政治学と政策学を区別した後、本項の結論でこう述べる。「勿論、ソノ干係〔政治学と政策学の関係〕ハ密接ナリ。凡ソ社会現象ヲ因果的機械的ニノミ見ルコトハ不可能ナリ。Teleologisch ナ見方ヲ必要不可欠トス。二者ノ研究ヲ併セテ初メテソノ実相ヲ見得ルナリ。故ニ、政治学ト政策学トヲ併セテ初メテ完全ナルナリ。故ニ、之ヲ合シテ、之ヲ広義ノ政治学ト云フコトハ可能ナルベシ。サレド、論理上ハ判然ト分ツベキモノナルナリ¹⁸⁰⁾」。これも小野塚を意識したもののだろう。政治学と政策学を合わせたものを、小野塚が「狭義の政治学」としたのに対して、神川は両者を合わせて「広義の政治学」と呼ぶことは可能だと認めつつも、論理上は判然と分かつべきだと念を押しているのである。神川にとっての「狭義の政治学」は経験科学・普遍化的文化科学としてのそれ——「国内ノ政治的状況ヲ研究スル」従来の政治学（国家政治学）と「国際社会ニ於ケル政治的闘争ヲ研究スル」国際政治学だからである¹⁸¹⁾。哲学の部門に入る政策学とは判然と分かつべきものであった。

では、同じ哲学の部門に入る政策学と政治哲学の違いは何か。神川いわく、政策学が「政治価値ヲ基礎トシテ、實際ノ政治法則等ヲ批判スル」のに対して、政治哲学は「何等経験法則ト連関スルコトナク、政治価値ソノモノヲ研究スル」ことにある。政治哲学によって初めて「政治価値及ソノ他ノ文化価値トノ関係」や「価値ノ主従・優劣・System 等」が分かり、政策学は実際の政治法則を批判できるようになるし、政治学の方法論（Methodenlehre）としても役立つようになるという¹⁸²⁾。

こうして、新カント主義のリッケルトを援用して、政治学、政策学、政治哲学を判然と分けて整理し、総合社会学的政治学の大山批判を展開した神川の講義から受けた「暗示」は、のちの矢部の政治学方法論へ継承された。矢部の政治学講義テキストの導入には、戦前・戦時・戦後一貫して下記のような件がある。

宇宙の事象を、自然現象と文化現象に二分すれば、政治現象は文化現象の一部をなし、更に文化現象を個人現象と社会現象に分つならば、政治現象は社会現象に属する。

かゝる政治現象を、その究明の対象とするところの学を、広く政治学と称することが出来る。政治学は即ち、文化的社会的なる学の一部門である。

一般に文化的社会的学を、その認識方法

に依て、規範学 (Normwissenschaft)、法則学 (Gesetzwissenschaft)、政策学 (Politikwissenschaft)、の三領域に分つことを得る。規範学は、その認識対象の当為 (Sollen)、理想、窮極価値を論じ、法則学は、その存在 (Sein)、現実を論じ、政策学は、かゝる存在、現実を認識批判し、それをその当為、理想に向つて向上せしめるための、政策 (Politik) を論ずる。

かくの如き三領域に対応して、広義の政治学を、政治哲学、政治科学、及び、政治政策学の三部に分つことを得る。〔中略〕

上記の認識方法による三領域の中、何れを以て固有の政治学の領野とすべきかについては、諸説対立して定説を知らぬけれども、それは本質的に、政治政策学の領野に於て、求めらるべきものと信ずる。元より、上述の如く、政策学は一方に当為、理想を前提し、他方に存在、現実を基礎とし、この二領域の接合、調和を、その論究の課題とするもので、即ち政治政策学は、必然に政治哲学と政治科学とを、その両端に前提する。換言すれば、政治哲学、政治科学、及び政治政策学は、各自独立せる別個の部門ではなくして、寧ろ相結合し相関聯し、凡ゆる政治的現実より最高の政治的価値にまで連なるところの、目的的一体系をなすものと言ふべく、而してこの体系の中心点をなすところの政策学の領域こそ、固有の政治学の領域と言ふべきなのである。¹⁸³⁾

神川による三領域分類と定義を継承していることは明らかである。神川の講義が実に「素敵」で「暗示的」だったためであろう、矢部は講義を聴いた後、「第一ニハ大学ニ残ル為モ一度小野塚サンニ交渉スルコト。神川サンヲ訪問スルコト」(1925年12月7日条)と、大学に残るために神川を訪問しようとしていた。実際には、河合栄治郎の仲介で小野塚に会うことができたので(14. で詳述)、神川を訪問することはなく、「国際政治学概論」講義も聴講をやめてしまう。

(2) 小野塚からの継承 一人間個人の「自由意思」

矢部は神川による三領域分類と定義を継承したものの、「政治政策学」を固有の政治学の領域とした点については、狭義の政治学から政策学を排除した神川ではなく、将来的には政策学のみをもって政治学と呼ぶ日が来るとした小野塚を継承したと見る方が正しい。

もっとも、神川が狭義の政治学から政策学を排除していたとはいえ、戦間期には「国際政治政策学」に重きを置いていたことは周知である。戦間期の主著『国

際聯盟政策論』は本来「国際政治政策論」と題したかったと後年述べている¹⁸⁴⁾、外交史講義では、国際連盟を讚美して興奮のあまり教壇からころげ落ち、それでもなお床上から講義を続けたとの逸話もあるくらいである¹⁸⁵⁾。しかし、神川国際政治学は1930年代半ばからドイツ地政学に傾倒していく過程で、「国際政治政策学」は形骸化し、完全に「国際政治科学」が中心を占めるようになっていった¹⁸⁶⁾。

一方の矢部も、前述の通り、2年次に書いた論文「帝国主義の経済的考察」で世界国家を念願していたが、それは神川の論文「歴史の進化に於ける国際聯盟¹⁸⁷⁾」(1924年)も参照して主張されたものであった(10. 参照)。だが、1930年代半ばから神川と歩を合わせるようにして、シュミット (Carl Schmitt)、カー (Edward Hallett Carr) に傾斜し、「地域主義」「現実主義」的な関心を戦後にも連続させ¹⁸⁸⁾、憲法調査会でも共に改憲を唱えていく¹⁸⁹⁾。こうした神川との共通点を見ると、矢部も「政治科学」に軸足を移しそうにも思える。矢部と神川を分けたものは何だったのだろうか。

まず矢部は、「政治科学」では社会学になってしまうと考えていた。戦前の講義要旨では学生の筆記の労を省くために簡潔な記述にとどめたためか明記されていないが、戦後の一般向け教科書では講義で口述していたと思われる説明が多く加筆されており、政治学方法論についても以下のように言及している。

「政治学を何とかして「科学」たらしめようとする人々は、多くは法則学としての政治科学こそ政治学の領域だと主張する」とし、その主流として、モスカ (Gaetano Mosca)、ミヘルス (Robert Michels)、パレト (Vifredo Pareto)、オッペンハイマー (Franz Oppenheimer)、グンプロヴィッツ (Ludwig Gumplowicz)、ラッツェンホーファー (Gustav Ratzenhofer)、「更にとりわけマルクス主義に立ついわゆる「社会科学」者」を挙げる。そのうえで、矢部は彼らをこう批判する。「しかしこの様な方法は一言にすれば窮極のところ、支配や権力に関する社会学に帰着せざるを得ぬ。上に挙げた学者も多くはむしろ社会学者として知られている。マルクス主義のいわゆる「社会科学」は、そのような論法の蔭に実は一つの政治目的を蔵している。これらに依つて社会集団や社会階級の権力闘争の分析や法則は得られるかも知れないが、政治という現象は、後に説く様にただそれだけでは尽されず、政治学が社会学と別個に存立する根拠もそれだけでは論証されない¹⁹⁰⁾」。

この批判は神川にも向けられたものと解することができる。神川の国際政治学の基底には一貫して、社会ダーウィニズムの一派であるオーストリア社会生物学派のグンプロヴィッツ、ラッツェンホーファー、オープンハイマーに学んだ闘争説があったからである。もとより、「国際政治政策学」に重きを置いていた戦間期の神川は、同じ生物学的自然法則でも、クロポトキン（Pjotr Kropotkin）の「相互扶助」から導かれる「連帯」法則に重きを置いて、現実の「闘争」を理想の「連帯」へと高めていくことをめざしていた¹⁹¹。だが、どちらも結局は「法則」である。神川の法則へのこだわりは、矢部にとっては社会学からの独立に成功したとはいえないものだったのである。

さらに、神川が自然法則にこだわることは、矢部にとってそもそも「文化科学」といえないものであった。戦前の講義要旨からすでに、「政治学は文化的学である。故に、生物学、心理学、地理学等の、自然法則に依る自然諸科学が、自然的生物的存在としての人間の究明に対し、如何に多くの示唆を与ふとも、それが自ら直ちに文化法則の上に立つ政治学の方法となることは出来ない」と述べていた¹⁹²。戦中の講義口述では「Darwinism ヤ心理学ニ基ク政治学ハ不当デアルト云ハナケレバナラナイ」とより辛辣である¹⁹³。戦後の教科書では、「政治学は例えば生物学に多くのものを負う。嘗つて十九世紀にはダーウィニズムが政治学に圧倒的な感化を与え、その生存競争や、自然淘汰や、進化の諸法則は、そのまま政治の法則とさえ認められた。後にも見るように国家有機体説や、民族の概念などには、生物学の感化が極めて大きい」とその意義を認めつつもこう述べる。「生物学、心理学、地理学、更にその他の種々の自然科学——尤も社会心理学になれば、自然科学よりも社会学に近い——が、政治学に与える寄与はまことに絶大である。だがしかしそのことを否認するのではないけれども、やはりこれらの自然諸科学がそのまま政治学になるのではないし、これら諸学で発見される自然法則が、そのまま政治法則として認められるのでもないことを忘れてはならぬ。若しこれらの自然法則が絶対的に人間を規定しているというなら、人間の主体性や、叡知や、創造性や、理想性は存立の余地はない。人間の持つこれらの諸要素を認めるからこそ、自然科学に対して文化科学が成立するのである。のみならず政治学は単に現実のみを研究するのではなく、理想や目的を前提として政策をも研究しなければならぬ¹⁹⁴」。

矢部にとって、「文化科学」としての政治学の条件

は、自然法則に抗して、人間の主体性、叡知、創造性、理想性を発揮し、政策を研究・実行して、理想や目的を実現しようとするににあったのである。これはまさしく小野塚の政策学の継承にほかならない。

小野塚の政策学は、『政治学大綱』の第三編「政策原論」第一部「政策前論」第三章「政治及び政策」で詳説される。小野塚はまず、政治を「国家機関及び国民ノ行為ニシテ直接ニ国家ノ根本的活動ニ関スルモノノ総称」と定義する¹⁹⁵。次に、これに対応させて、政策を「国家機関及び国民カ国家ノ目的ヲ達センカ為メニ採ルヘキ手段」と定義する¹⁹⁶。ここでは、政治に「国民ノ行為」を入れていることが重要である。政治は国民の行為であるからこそ、政策は「個人」の政治的行為に「自由意思」を前提とし、政策論はこれを予想し、個人の行為が下等生物のような本能によるものではないことを前提とすると注意を促す¹⁹⁷。したがって、人間が「自然界ノ諸物ノ如ク」、自然法則に支配されて「行為ノ帰着既ニ予メ一定シテ変セサルモノナリトノ説明ハ明ニ現時ノ思想ニ抵触ス」と釘を刺す¹⁹⁸。そのうえで、本章の最後の項「理想ト自然」では、「自然ハ平等ニシテ理想ハ自然ニ近ヅクニアリ」という説はすでに「陳腐ノ旧説」だと斥け、「理想ノ観念ハ人為的ナリ。自然界ニ孤立シテ存在スル理想ナシ。生物間ニ於ケル自然ノ法則ハ自然淘汰ナリ。人類ハ自ラ理想ヲ作り、是ニ従テ人為淘汰ヲ試ミ、以テ自然淘汰ノ進行ニ影響ヲ与フ」と結論する¹⁹⁹。小野塚は、生物学的自然法則の「自然淘汰」に抗して、人類が「自由意思」で理想を作り、現実をその実現に向かって改善していくことを「人為淘汰」と称して対置したのである。

このように上記の章では、小野塚は自然法則を否定しているけれども、酒井哲哉氏と春名展生氏が明らかにしたように、他の箇所では、生物学出身の地理学者ラッツェル（Friedrich Ratzel）の翻案を介してダーウィンの進化論を継承し、グンプロヴィッツやラッツェンホーファーの社会学的国家論にもとづく権力政治的国際政治観を唱えており、その側面を最もよく継承したのが神川であった²⁰⁰。

しかし神川は、政治の主体を「社会群（社会集団 Mass）」と見て、「純粋ニ個人的ナル行為ハ政治ニ非ズ」と断言し、個人の政治的行為を否定した²⁰¹。これは人間「個人」の「自由意思」を強調した小野塚の否定を意味しよう。

では、なぜ小野塚は自然法則を否定し、「個人」の「自由意思」の尊重を力説したのだろうか。それは、

「個人」の「自由意思」を認めることが、責任ある政治主体を育成するための大前提だったからである。「意思ニ行為撰撰ノ自由ヲ認ムルガ故ニ始メテ其撰撰ニ伴フ責任ヲ生スルナリ。若シ意思ノ自由ヲ全然否認セハ、吾人ノ考慮ナルモノハ無意味ニシテ義務ノ觀念モ無用ノ長物タルヘシ。〔中略〕国家機関ノ責任、各種ノ審議、法ノ制裁、不可抗力ニヨル行為ノ無責任等皆個人ノ自由意思ノ基礎ニ立タザルモノナシ²⁰²⁾」。「衆民主義」者・小野塚の矜持が窺える。個人の自由意思を否定し、自然法則に身を委ねたままでいては、責任ある政治主体はいつまでも育たず、それは国家運営にも支障をきたすことになるのである。この点において、小野塚と神川は袂を分かつのであった²⁰³⁾。

小野塚の後継者として衆民政研究に従事した矢部の「政治政策学」は、小野塚の「自由意思」を尊重した政策研究の継承であった。矢部が受講した小野塚の1924年度「政治学」講義では、同箇所において、『政治学大綱』にはない「政策研究」に関する簡潔な定義がある。「政策研究ハ政策ノ必要トソノ実行ノ可能性トヲ前提トシ、又政策ノ限界ヲモ承認シ、事実ノ上ニ立ツト同時ニ、理想ヲ着実ニ構成スベキコトヲ意味スルナリ。所謂、Real Politik 現実政策ト理想政策トノ調和ヲ企ツベキモノナリ」。さらに、「着実ニ構成」の箇所には、

「着実ニ construct ストハ Utopia ノ学ヲ排スルナリ」と補記がある²⁰⁴⁾。小野塚の掲げた理想は、決して空想的なユートピアではなかった。『政治学大綱』の定義によれば、理想とは「将来ノ現実ノ希望」であり、理想政策とは「国家ノ目的ヲ達スル（達シ終ルコトナシ）途上ニ於テ、現在ヨリモ一層進歩シタル国家ノ状態ヲ予想シ、此予想ニ向テ現存ノ状態ヲ接近セシメン欲ス」もの、現実政策とは「政策ヲ組織スルニ際シ、空想ニヨラズシテ現存ノ事実ヲ見、各種ノ勢力ヲ計算シ、政治的行為ノ結果ニ於ケル不測ノ分子ヲ最少限度ニ止ラシム」ものであった²⁰⁵⁾。

空想ではなく、現存の事実を注視して、理想を着実コンストラクトに構成していく。そのためには、徹底的な実証的研究が不可欠であった。小野塚はたびたび弟子たちに実証的研究の必要性を強く説き、矢部も真摯に受け止め、早い段階から自らの課題として意識しながら研究者としての歩みを始めていく²⁰⁶⁾。

以上のように、矢部が神川から受けた「素敵」な「暗示」は政治学、政策学、政治哲学の三領域分類と定義の継承のみであった。それゆえか就職後、矢部の神川に対する評価は下がっていく²⁰⁷⁾。

(6) に続く

156) 前掲『東京大学百年史』部局史1、187頁。

157) 前掲丸山ほか編『聞き書 南原繁回顧録』130頁。南原は戦後、『神川彦松全集』の宣伝リーフレットで、「政治と政治学のコペルニクスの転回」と題して、神川を次のように讃えて同全集を推薦している。「生涯を学問の研究、ことに新しい分野の開拓にささげるといふことは、さほど容易なことではない。神川教授は東大卒業後、ただちに大学院に学び、学徒としての生涯を出発したのであるが、従来の政治学と外交政策論をもって満足せず、新しく国際政治学の樹立を目ざし、その理論と国際政治史学の研鑽に従事して、今日なお壯者を凌ぐものがある。しかも、かような研究は世界の学界においても未だ少なく、それは古い政治と政治学のコペルニクスの転回の主張である。現在あたかも世界の危機に直面し、新しい国際政治秩序の建設に際して、教授多年の労作は高く評価されていい」。

158) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正4年至大正5年』（東京帝国大学、1916年）91頁。

159) 神川彦松「外交史学から国際政治史学へ」（『国士館大学政経論叢』5、1966年）、同「わが国際政治学の生立ちについて」（『日本学士院紀要』25-1、1967年）、同「学問方法論について」（国士館大学編『国士館大学創立五十年記念論文集』国士館大学、1967年）。

160) 「〔矢部貞治ノート（昭和期27）〕」（『矢部文書（憲政）』112-07）。

161) 1冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期21）〕」（『矢部文書（憲政）』112-01）は、表紙に「極東外交関係（I）英国ノ極東政策 ソノ他ノ機関」と記された洋書3冊の抜書であり、一番新しい文献は1939年出版である。2冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期22）〕」（『矢部文書（憲政）』112-02）は、表紙に「極東外交関係（II）」とあるから、1冊目の続きである。3冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期23）〕」（『矢部文書（憲政）』112-03）は、表紙に「極東外交」とあり、文献のなかに大高二郎『支那事変と列強の動向』（日本青年外交協会、1938年）がある。4冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期24）〕」（『矢部文書（憲政）』112-04）は、表紙に「昭研 外交」とあり、昭研研究会の外交スタッフ会などの討議メモである。5冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期25）〕」（『矢部文書（憲政）』112-05）は、表紙に「新秩序、旧秩序」とあり、カール・シュミット『域外列強の干渉禁止を伴う国際法的広域秩序』の第2版（1940年）等の抜書である。8冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期28）〕」（『矢部文書（憲政）』112-08）は、表紙に「英国政治」とあり、4冊の洋書抜書にくわえて、1942年3月29日の世界問題研究会での討議メモが記されている。この研究会の討議メモは、9冊目（「〔矢部貞治ノート（昭和期29）〕」（『矢部文書（憲政）』112-09）にも続く。

162) 「〔矢部貞治ノート（昭和期26）〕」（『矢部文書（憲政）』

- 112-06)。
- 163) 矢部貞治「多数決の社会的機能」(一) (『法学協会雑誌』52-7、1934年) 43頁。なお、神川『国際聯盟政策論』は、矢部の政治学講義でも常に参考文献としてあげられた。矢部貞治『政治学講義要旨』(非売品、1933年) 163頁、同『政治学講義要旨』(非売品、1937年) 209頁、同『欧洲政治原理講義案』下(非売品、1938年) 196頁、同『政治学』(勁草書房、1949年) 340頁。
- 164) 二宮三郎「日本の国際政治学の開拓者たち」(『流通経済大学論集』27-1、1992年) 48頁。日本の国際政治学研究史についてはあわせて、川田侃・二宮三郎「日本における国際政治学の発達」(『国際政治』9、1959年)、二宮三郎「戦後日本における国際政治学の動向」(『国際政治』25、1964年) も参照。
- 165) 前掲『東京大学百年史』部局史1によれば、1927年5月「神川教授科外講義、国際政治学開講」(192頁)、1928年5月「神川教授演習開始」(194頁)、同年12月「神川教授演習開講」(195頁)、1929年5月「神川教授演習開講」、1930年10月「神川教授外交史及国際政治演習開始の件可決」(200頁)、1931年4月「神川彦松教授、外交史及国際政治演習(当分の間、一週二時間)開催の件可決」(203頁)、1932年10月「神川彦松教授十九日から外交史及国際政治演習開始の件承認」(210頁)、1933年9月「南原繁教授、神川彦松教授、演習の件承認」(216頁)、1945年10月「本年度中に左の特別講義を行う計画を決定。神川教授、国際政治関係」(252頁)。なお、1942年10月、神川は特別講義「支那中心の外交史」を承認されているが、この時「国際政治学」特別講義を承認されたのが矢部であった(242頁)。矢部はさらに翌43年4月「世界新秩序の研究」と題して約五回の特別講義を行う件」を承認されている(244頁)。周知の通り、この講義をもとに、矢部は『新秩序の研究』(弘文堂、1945年)をまとめる。
- 166) 神川彦松『国際政治学概論』(勁草書房、1950年)はしがき。
- 167) 前掲春名『人口・資源・領土』第1～4章、特に113～116頁参照。日本の社会学史についてはさしあたり、秋元律郎『日本社会学史』(早稲田大学出版部、1979年)参照。
- 168) 飯田泰三「ナショナル・デモクラットと「社会の発見」」(同『批判精神の航跡』筑摩書房、1997年、初出1980年)。
- 169) 石田雄『日本の社会科学』(東京大学出版会、1984年) 94頁以下。
- 170) 大山郁夫『政治の社会的基礎』(同人社書店、1923年) 132頁以下。大山の「科学としての政治学」については、藤原保信『大山郁夫と大正デモクラシー』(みすず書房、1989年) 第三章参照。
- 171) 蠟山政道がその代表であろう。蠟山は第一次大戦後、新進気鋭の政治学者として、従来の国家学的政治学と社会学的政治学の両者を、新カント主義と多元的国家論を用いて批判的に結合することをめざし、初の単著『政治学の任務と対象』(巖松堂書店、1925年)で一定の解を示した。詳しくは、三谷太一郎「日本の政治学のアイデンティティを求めて」(同『学問は現実に関わるか』東京大学出版会、2013年、初出1999年)参照。
- 172) 神川は、「高田保馬社会学概念モ漸ク之〔総合社会学という考えが、リッケルトの考察にもとづけば誤りだということ〕ヲ認ムルニ至レリ」と述べている(前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」第13画像目)。高田社会学については、大道安次郎『高田社会学』(有斐閣、1953年)参照。
- 173) 前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」第6画像目。
- 174) 戸澤鐵彦「政治学疑義」(三)・(四) (『国家学会雑誌』37-10、11、1923年10、11月)。戸澤政治学については、横越英一「戸沢政治学における政治概念と国家論」(同編『政治学と現代世界』御茶の水書房、1983年)が詳しい。
- 175) 前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」第8画像目。
- 176) 小野塚喜平次『政治学大綱』上巻(博文館、1903年) 19～20頁。
- 177) 前掲矢部「政治学 小野塚教授」第16画像目。
- 178) 前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」第9画像目。
- 179) 前掲神川『国際政治学概論』11～15頁。
- 180) 前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」、第10画像目。
- 181) 同上、第4画像目。
- 182) 同上、第12～13画像目。
- 183) 前掲矢部『政治学講義要旨』(1933年) 1～2頁。本書は、矢部の初めての政治学講義(1932年度)をもとに執筆され、翌年度から使用されたものである(矢部日記1933年4月6日・25日条に、プリント執筆の旨記載がある)。引用箇所の記事は、留学後の講義要旨でも変わらない。同『政治学講義要旨』(1937年) 1～2頁、同『欧洲政治原理講義案』上(1938年) 1～2頁。戦後の一般向け教科書でも若干加除修正はあるものの、大要に変更はない。矢部貞治『政治学』(海口書店、1947年) 9～11頁、同『政治学』(勁草書房、1949年) 1～2、8～11頁。
- 184) 『神川彦松全集』第1巻(勁草書房、1966年) 456頁。
- 185) 福田歎一『丸山眞男とその時代』(岩波ブックレット、2000年) 13頁。松本馨「近代国際政治史」(『神川彦松全集 月報』2、勁草書房、1967年) 1～2頁。
- 186) 前掲春名『人口・資源・領土』第5章、特に248～249頁。ただし、1925年度講義で、狭義の政治学から政策学を排除していたことからすれば、神川は戦前～戦後一貫して「国際政治科学」を中心に置いていたとみることができる。
- 187) 神川彦松「歴史の進化に於ける国際聯盟」(『国家学会雑誌』38-8、1924年)。
- 188) 前掲春名『人口・資源・領土』273～275頁、酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』(岩波書店、2007年) 第1章参照。
- 189) 憲法調査会における活動については、廣田直美『内閣憲法調査会の軌跡』(日本評論社、2017年)、神川の改憲論は、佐藤太久磨「自主憲法精神、その起源と揺

- 曳」(『立命館大学人文科学研究紀要』105、2015年)、
矢部の改憲論は、玉木寛輝「戦後憲法改正論の系譜」
(『法学政治学論究』97、2013年)参照。
- 190) 矢部貞治『政治学』(勁草書房、1949年) 9頁。
- 191) 春名展生「国際政治学の生物学的基礎」(『国際政治』
148、2007年)。
- 192) 前掲矢部『政治学講義要旨』(1933年) 4頁、同『政
治学大綱』(1937年) 4頁、同『欧洲政治原理講義案』
上(1938年) 4頁。
- 193) 矢部貞治講述『政治学(上巻)』(啓明社、1943年) 13
頁。
- 194) 矢部『政治学』(勁草書房、1949年) 14~15頁。
- 195) 前掲小野塚『政治学大綱』下巻、48頁。
- 196) 同上、54頁。
- 197) 同上、55頁。
- 198) 同上、56頁。
- 199) 同上、63~64頁。読みやすさを考慮して、適宜句読点
を施した。以下も同様。
- 200) 酒井哲哉「社会民主主義は国境を越えるか?」(『思
想』1020、2009年) 138~139頁、前掲春名『人口・資
源・領土』第4章。一方、田口富久治氏は、小野塚の
進化論思想は、「人為淘汰」を試みている点で、アメ
リカ社会学のウォード(Lester Frank Ward)と親近性
を有していたとする。田口富久治『日本政治学史の源
流』(未来社、1985年) 103頁。
- 201) 前掲「[矢部貞治ノート(昭和期27)]」第17画像目。
- 202) 前掲小野塚『政治学大綱』下巻、57頁。
- 203) この点すでに春名展生氏が、「神川が生物的な「法則」
を手がかりに国際連盟の出現を描いたのは、「自然」
よりも「意思」の働きを尊重した小野塚の思想とは相
容れない」と指摘しており(前掲春名『人口・資源・
領土』175頁)、本稿で神川と矢部の相違を考察するに
あたり大きな示唆を得た。
- 204) 前掲矢部「政治学 小野塚教授」第41画像目。
- 205) 前掲小野塚『政治学大綱』下巻、61頁。
- 206) 矢部日記によれば、矢部が助手になって2ヶ月ほど
経った頃、「小野塚先生に誘はれて南原〔繁〕先生、

岡〔義武〕君と一緒に一白舎でお茶を飲み乍ら色々の
話を聞く。先生の留学中の話を聞いた。先生は又強く
強く実証的研究の必要を説かれた」(1926年6月5日
条)という。そして10日後、矢部は民法学者・我妻榮
の論文「私法の方法論に関する一考察」(一)(『法学
協会雑誌』44-6、1926年)を読み、こう感想を書き記
した。「帰って夕食の後久し振りに夜机に向って法学
協会雑誌を読む。非常に快く読んだ。一は我妻氏の私
法の方法論に干するもので、批判的法律哲学と実証的
裁判中心主義の間に立って何れを採るかに迷ってゐら
れる。そして常に批判に注目しつゝ実証的研究に就き
且空虚なる深遠の理想論よりは、刻々に覆さるゝとも
事実の実証の上に立つ理想を立てんことを欲するとせ
られる。問題は俺に極めて切実のことである。大いに
暗示を獲た。」(6月15日条)。

- 207) 矢部は、神川の博士論文「国際聯盟政策論」の審査が
教授会にかけられた際、「神川氏のものハ大したもの
でハないだらうが」(1929年2月14日条)と評してい
る。神川への低評価は、吉野作造にも見られる。吉
野日記1932年7月5日条にこうある。「四時からは御
殿で政治学研究会があつた この方では神川君が「戦
争論」の報告があつた 材料は面白かつたが学術論と
しては頗る分析の鋭利を欠き残念であつた 矢張りあ
まり頭がよくない」(『吉野作造選集』15、岩波書店、
1996年、401頁)。吉野はこのように、神川の研究を実
証的研究としては水準が低いと評価しており、矢部も
同じように捉えていたと思われる。なお、神川の「戦
争論」は、矢部日記の同日条によれば、「戦争の進化」
とされている(矢部は内容については評価していな
い)ので、おそらく1年後に発表される論文「戦争学
説」(一)~(三)(『国家学会雑誌』47-10~12、1933
年)の構想発表であつたと推定される。

〔附記〕本稿はJSPS 科研費(20K13168)の助成を受
けたものである。

(2023. 8. 24 受理)

表7 神川彦松「国際政治学概論」1925年度講義の内容
 科外講義（冬学期・12～13回ほどの予定）
 開講曜日：冬学期 火曜午後

目 次	日 付
第一章 国際政治学ノ概念	[不明]
第一節 国際政治学ノ科学体系ニ於ケル地位	
第二節 国際政治学ノ意義	
第三節 国際政治学ト其ノ姉妹科学トノ干係 ^[四]	12/1 (火)*
国際政治学ト外交史（国際政治史）トノ干係 ^[四]	
国際政治ト国際政治政策トノ干係 ^[四]	
政策論ノ可能性ト経験科学トノ干係 ^[四]	
政治学ト政治哲学	
政策学ト政治哲学	
第二章 政治ノ概念	12/15 (火)*
[以下欠]	

- ・「[矢部貞治ノート（昭和期27）]」（『オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺』112-07、原本は矢部家所蔵、衆議院憲政記念館保管）をもとに作成。
- ・「日付」のうち、*の箇所は「矢部貞治日記（未刊行部分）」（『オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺』11、原本は矢部家所蔵、衆議院憲政記念館保管）にも受講した旨の記述がある。